

春風の優しさで

副校長 遠藤 久利

わたしは、買い物が大好きで、よくスーパーに出かけます。子どもの頃は、駄賃をもらっても嫌いだったのですが、今では、いろいろな品物を見て回るだけでも楽しくなります。わたしは、頼まれた夕飯の惣菜類をかごに入れてレジに並びました。夕方時でしたので大勢のお客さんで混み合っていました。わたしの前には、紙切れとポイントカードをもったおじいさんが立っていました。そのおじいさんの番になると、なにやらレジ係の人につぶやき始めました。どうやら、そのおじいさんは、家族のだれかにお買い物メモを持たされて、お遣いに来たようです。

「おじいちゃん、ここは、お金をはらうところですよ。お買い物をかごに入れて並んでくださいね。」

と、レジ係の人が何度話しかけても、おじいさんは、メモの紙切れを見せて、ぶつぶつとつぶやくばかりです。そのやりとりを後ろで聞いていたわたしは、『こりゃあ、このおじいさんと一緒に買い物するしかないかな。』と思っていると、レジ係の人が、アナウンスを入れて、レジを代わってもらい、そのおじいさんと一緒に買い物のおつきあいをしたのです。わたしは、その行為を見て、とても幸せな気持ちになりました。そういう行動がとれるレジ係の人の優しさでとそういう人を育てているこのスーパーの経営者がすばらしいなと心がじんじんじしました。

もうひとつ、心がうるうるしたできごとがありました。

5月19日の7時半頃、わたしは、ある総会終了後、残った冊子を紙袋に入れて関内駅に向かいました。あいにくその日は台風の影響で、風雨が強く傘が役にたちません。駅構内に着くと同時に紙袋が破け、中に入っていた冊子類が、どさっと落ちて辺りに広がってしまいました。慌てて落ちた冊子を拾い集めていると、若い男の人が、黙って拾い集めるのを手伝ってくれたのです。おまけにリュックの中からレジ袋を取りだして「これでよろしければ使ってください。」と言ってくれたのです。なんて、心の優しい人なのでしょう。

「春風以って人に接し秋霜以って自ら肅む」といのは、わたしの心の師、M校長先生がよく口にされていた江戸時代の儒学者佐藤一齋『言志語録』のことばです。人間は自己中心的になりがちで、何か不幸が起こっても、無関心を装うとするか、あるいはできるだけ自分より他に責任を転嫁しようとするものです。この佐藤一齋のことばは他人には春風のもつ優しさで接し、自分には秋の霜のような冷厳さで反省して、自分の至らないところを知る、という意味ととらえています。

しかし、人によっては一齋とは逆に「春風以って自ら楽しみ、秋霜以って人に接する」のが、現代に生きる道だと言う人もいるかもしれません。でも、そんな人ばかりだったら、世の中は、けんかと争いに覆われしまうことでしょう。春風の優しさで人に接することは難しいことかもしれませんが、できるだけそうなろうと努力していくことが大切なのだ。と今回の体験を通して強く感じたわたしでした。